

ワイルド&ヘンリーの世界  
(有名な短編集)

はじめに

さて、今回の『ワイルド&ヘンリーの世界』（有名な短編集）という作品は、世界的にも著名な作家である「オスカー・ワイルド」と「オー・ヘンリー」の特に有名な短編集である。「幸福の王子、わがままな大男、最期の一葉、賢者の贈り物」などを収めたものであり、それらの作品の内容は、次のようなものである。

まず、最初の『幸福の王子』という作品であるが、それは「……ある町の高い円筒の上に『幸福の王子の像』が立っていました。ある晩、その町に小さなツバメが飛んできて、その王子の両足のちょうど間に止まりました。その幸福の王子は貧しい人たちを見ては涙し、自分を飾っている装飾品などをそれらの貧しい人たちに届けてくれないかと小さなツバメに頼むのでした。次に、『わがままな大男』という作品であるが、それは「……ある日、大男が七年ぶりに『自分の城』に帰って見ると、子供たちが彼の庭で楽しく遊んでいるのが見え、ここで何をしているんだと叫んで追い払い、庭の周りに高い壁をめぐらし『立ち入り禁止』の立札を立ててしまう。すると、なぜか春が来ても、わがままな大男の庭だけは冬のままなのでした。また、『最期の一葉』という作品であるが、それは「……ある地区に画家たちが集まって『芸術家村』ができあがるが、その三階建ての煉瓦造りの最上階に、スーとジョンジーは共同でアトリエを持った。ところが肺炎が芸術家村にも入りジョンジーを襲い、彼女は寝込んで、ベットの上で動けなくなり、隣りの建物の壁を見ているだけになってしまう。そして、最後の『賢者の贈り物』という作品であるが、それは「……明日はクリスマスだというのに、夫（ジム）に贈り物を買うお金がドル八十セントしかなく、大切なジムなのに……。妻（デラ）は、夫ジムのために何かすばらしいものをあげようと、長い間計画していたのです。何か、すてきで、めったにないもの——ジムの所有物としてそれに最もふさわしいものを」という内容であり、これらの作品に興味や関心がありましたら、ぜひとも訪ねて見てください。

令和六年五月吉日（決定版）

如月翔悟

目次

ワイルド&ヘンリーの世界  
(有名な短編集)

はじめに

オスカー・ワイルドの世界  
(有名な短編集)

- 一、幸福の王子
- 二、わがままな大男

オー・ヘンリーの世界  
(有名な短編集)

- 一、最後の一枚
- 二、賢者の贈り物

※ 参考文献

幸福の王子

(オズカー・ワイルド)

## 目次

### オスカー・ワイルドの世界

#### 幸福の王子

- 一、ある町の高い円筒えんとうの上に「幸福の王子の像」が立っていました
- 二、ある晩、その町に小さなツバメが飛んできました
- 三、幸福の王子の両眼は涙でいっぱいになりました
- 四、熱のある子供と貧しい母親の家にツバメは大きなルビーを運ぶ
- 五、芝居を完成させたい貧しい若者の家に王子の眼のサファイアを運ぶ
- 六、マッチ売りの少女の所ところに王子の眼のもう一つのサファイアを運ぶ
- 七、王子の体の純金を一枚一枚はがして貧しい人たちのところに運ぶ
- 八、翌朝、市長や市会議員しかいたちが「幸福の王子の像」を見てみると……
- 九、天使は、神様のところに鉛の心臓と死んだ鳥を持ってきました

#### ※ 参考文献

## 幸福の王子

(オスカー・ワイルド)

一、ある町の高い円筒の上に「幸福の王子の像」が立っていました

町の空高く、高い円筒の上に「幸福の王子の像」が立っていました。王子の像は全身うすい純金で覆われていて、目には二つのきらきらしたサファイアと、また大きな赤いルビーが剣の柄に輝いていました。

王子は町の皆の自慢でした。「……風見鶏と同じくらい美しい」と、芸術的な趣味の所有者だという評判を得たがっている一人の市会議員が言いましたが、「……もつとも風見鶏ほどには役には立たんがね」とつけ加えて言いました。それは非現実的な人間だと思われはしないかと、それが心配でそう言ったのですが、実際に彼は非現実的な人間（つまり夢想家）なんかじゃなかったのです。

\*

\*

さて、「……どうしてあの幸福の王子みたいにちゃんとできないの」と、月が欲しいよと言って泣いている幼い男の子に、頭のよさそうなお母さんが聞きました。そして、「……幸福の王子さまはね、何かがほしいなどと言って決して泣いたりしないのよ」と言うのでした。すると、「……ほんとうに幸福な人間がこの世に誰かいるとはうれいことだね」と、その幸福の王子様の像を見つめながら、失望した男の子はつぶやくのでした。

やがて、「……天使そっくりだね」と、あざやかな深紅の外套を着て、きれいな白い前掛けをつけて大会堂から出てきた、慈善学校の児童たちが言いました。すると、「……どうしてそれがわかるの？ 天使なんか見たこともないくせに」と数学の先生が言いました。すると、「……ああ、でも見たことはありませんよ。夢の中で」と子供たちは答えるのでした。すると数学教師は眉をひそめてとても厳しい顔つきをするのでした。というのも（論理好きで）彼には子供たちが夢を見てそれを信じている様なことはよろしくないと考えていたからでした。

二、ある晩、その町に小さなツバメが飛んできました

ある晩、その町に小さなツバメが飛んできました。友達らはすでに六週間前にエジプトに出发していましたが、そのツバメは残っていました。彼は最高にきれいな葦に恋をしていたのでした。ツバメが彼女に出会ったのは春のはじめ、大きくて黄色い蛾を追って川の下流へ向かって飛んでいた時でした。——葦のすらっとした腰があまりにも魅力的だったので、ツバメは立ち止まって彼女に話しかけたのです。

「……君を好きになってもいいかい」とツバメは言いました。ツバメは単刀直入に話すのが好きでした。葦は深くうなずきました。そこでツバメは、翼で水に触れながら彼女の周りをぐるぐると回り、銀色のさざ波を立てました。これはツバメからのラブコールで、それは夏中続きました。「……（葦の）彼女とはおかしな恋人だね。財産はないくせに、親戚だけは多過ぎるとききてる」と他のツバメたちはべちゃべちゃと言うのでした。実際、その川は葦でいっぱいだったのです。やがて、秋が来ると、そのツバメたちもみんな

飛んでいってしまいました。

\*

\*

みんなが行ってしまおうと、ツバメはさびしくなり、自分の恋人にも飽き始めました。「……彼女は何も話してくれないしな」とツバメは言いました。「……それに浮気っぽいんじゃないかと思うんだ。だって彼女はいつも風といちゃついているんだから」、確かに、風が吹くといつも、葦は最高に優美なおじぎをするのでした。「……彼女は家庭的なのは認められるけれども、僕は旅をするのが好きなんだから、僕の妻たるものも、旅をするのが好きでなくっちゃ」とツバメは続けて言うのでした。

そして、ツバメはどうとう「……僕と一緒に行ってくれないか」と彼女に言いました。でも、葦は首を横に振りしました。彼女は自分の家にとっても愛着があったのです。「……君は僕のことをもてあそんでいたんだな」とツバメは叫び、「……僕はもうピラミッドに出発するよ。じゃあね」とツバメは飛び去りました。……

\*

\*

さて、一日中ツバメは飛びつづけ、夜になって町に着きました。「……どこに泊まったらしいかな？ 泊まれるようなところがあればいいんだけど」とツバメは言いました。その時、ツバメは高い円柱の上の像が目にとまりました。「……あそこに泊まろう。あれはいい場所だ、新鮮な空気もたくさん吸えるしね」と声をあげて、そしてツバメは幸福の王子の両足のちょうど間に止まりました。

「……黄金のベッドルームだ」とツバメはあたりを見まわしながらそっと一人で言い、眠ろうとしました。ところが、頭を翼の中に入れてようとするとたん、大きな水の粒がツバメの上に着きました。「……何て不思議なんだ！」とツバメは大きな声をあげました。「……空には雲一つなく、星はとてもくつきりと輝いているというのに、雨が降っているなんて。北ヨーロッパの天候はまったくひどいもんだね。あの葦は雨が好きだったが、しかしそれはあいつのまったくの身勝手というものさ」と。すると、また一滴、落ちてきました。「……雨よけにもならないくらいなら、像なんて何の役に立つというんだ」とツバメは言い、「……もつといい煙突を探さなくちゃ」とツバメは飛び立とうと決心しました。

### 三、幸福の王子の両眼は涙でいっぱいになっていました

でも、翼を広げるよりも前に、三番目の水滴が落ちてきて、ツバメは上を見上げました。すると——何が見えたでしょうか。幸福の王子の両眼は涙でいっぱいになっていました。そしてその涙は王子の黄金の頬を流れていたのです。王子の顔は月光の中でとても美しく、小さなツバメはかわいそうな気持ちでいっぱいになりました。

「……あなたはどなたですか」とツバメは尋ねました。「……私は幸福の王子だ」と言うので、「……それなら、どうして泣いているんですか、もう僕はぐしょぬれですよ」とツバメは尋ねました。——「……まだ私が生きていて、人間の心を持っていたときのことだった」と像は答えました。「……私は涙というものがどんなものかを知らなかった。というのは私はサンサーシの宮殿に住んでいて、そこには悲しみが入り込むことはなかったからだ。昼間は友人たちと庭園で遊び、夜になると大広間で先頭切ってダンスを踊ったのだ。庭園の周りにはとても高い塀がめぐらされていて、私は一度もその向こうに何がある

のかを氣にかけたことがなかった。周りには、非常に美しいものしかなかった。廷臣たちは私を幸福の王子と呼んだ。実際、幸福だったのだ。もしも快樂が幸福だというならば。私は幸福に生き、幸福に死んだ。死んでから、人々は私をこの高い場所に置いた。ここからは町のすべての醜悪なこと、すべての悲惨なことが見える。私の心臓は鉛でできているけれど、泣かずにはいられないのだ」と言うのでした。

「……何だって！ この王子は中まで金でできているんじゃないのか」とツバメは心の中で思いました。けれどツバメは礼儀正しかったので、個人的な意見は声に出しませんでした。すると、「……ずっと向こうの」と、王子の像は低く調子のよい声で続けました。「……ずっと向こうの小さな通りに貧しい家がある。窓が一つ開いていて、テーブルについてご婦人が見える。顔はやせこけ、疲れている。彼女の手は荒れ、縫い針で傷ついて赤くなっている。彼女はお針子をしているのだ。その婦人はトケイソウ〔この花の副花冠はキリストのいばらの冠に似ているという〕花をサテンのガウンに刺繍しようとしている。そのガウンは女王様の一番可愛い侍女のためのもので、次の舞踏会に着ることになっているのだ。その部屋の隅のベッドでは、幼い息子が病のために横になっている。熱があつて、オレンジが食べたいと言っている。母親が与えられるものは川の水だけなので、その子は泣いている。ツバメさん、ツバメさん、小さなツバメさん。私の剣のつかからルビーを取り出して、あの婦人にあげてくれないか。両足がこの台座に固定されているから、私は行けないのだ」と言うのでした。

#### 四、熱のある子供と貧しい母親の家にツバメは大きなルビーを運ぶ

すると、「……私はエジプトに行きたいんです」とツバメは言いました。「……友人たちはナイル川に沿って飛びまわったり、大きな蓮の花に話しかけたりしています。まもなく、みんなは偉大な王の墓の中で眠ります。王もまた、その彩られた棺の中にいます。王は黄色の亜麻布（亜麻の織維で出来た織物）で包まれ、香料を使ってミイラになっています。首には青緑色の翡翠の首飾りがかけられ、王の両手はまるでしおれた葉のようなんですよ」と言うと、「……ツバメさん、ツバメさん、小さなツバメさん」と王子は言いました。「……もう一晩泊まって、私のお使いをしてくれないか。あの子はとても喉が乾いていて、お母さんはとても悲しんでいるのだよ」と言うのでした。

すると、「……私は男の子が好きじゃないんです」とツバメは答えました。「……去年の夏、川のほとりにいた時、二人の乱暴な男の子がおりました。粉引きの息子たちで、二人はいつも僕に石を投げつけました。もちろん一回も当たりませんでしたよ。僕たちツバメはそういう時にはとてもうまく飛びますし、その上、僕は機敏さで有名な家系の出でずから。でも、石を投げってくるっていうのは失礼な証拠ですよね」と言う。

でも、幸福の王子がとても悲しそうな顔をしたので、小さなツバメもすまない気持ちになりました。「……ここはとても寒いですね」とツバメは言いました。「……でも、あなたのところに一晩泊まって、あなたのお使いをいたしましょう」と言うと、「……ありがとう、小さなツバメさん」と王子は言いました。そこでツバメは王子の剣から大きなルビーを取り出すと、くちばしにくわえ、町の屋根を飛び越えて出かけました。

\*

\*

ツバメは、白い大理石の天使が彫刻されている聖堂の塔を通り過ぎました。宮殿を通り過ぎる時、ダンスを踊っている音が聞こえました。美しい女の子が恋人と一緒にバルコニーに出て来ました。「……何て素晴らしい星だろう。……そして愛の力は何と素晴らしいことだろう」と彼は女の子に言いました。すると、相手の女の子は、「……私のドレスが舞踏会に間に合うといいわ。ドレスにトケイソウの花が刺繍されるように注文したのよ。でもお針子はりこっていうのはとっても怠け者だから」と言うのでした。

ツバメは川を越え、船のマストにかかっているランタンを見ました。ツバメは貧民街ひんみんを越え、老いたユダヤ人たちが商売をして、銅の天秤でお金を量り分けるのを見ました。やっと、あの貧しい家にたどり着くと、ツバメは中なかをのぞき込みました。男の子はベッドの上で熱のために寝返りをうち、お母さんは疲れ切って眠り込んでおりました。ツバメは中に入って、テーブルの上にあるお母さんの指ぬきの脇わきに大きなルビーを置きました。それからツバメはそっとベッドのまわりを飛び、翼つばさで男の子の額ひたいをおおぎました。「……とても涼しい」と男の子は言いました。「……僕はきつと元気になる」と言い、そして心地よい眠りに入っていました。

##### 五、芝居を完成させたい貧しい若者の家に王子の眼のサファイアを運ぶ

それからツバメは幸福の王子のところに飛んで戻り、やったことを王子に伝えました。「……妙なことに、こんなに寒いのに、僕は今とても温かい気持ちです」とツバメが言うと、「……それは、いいことをしたからだよ」と王子は応こたえました。そこで小さなツバメは考え始めましたが、やがて眠ってしまいました。考えごとをするとツバメはいつも眠くなるのでした。

朝になると、ツバメは川のところで飛んでいき、水浴びをしました。「……何と驚くべき現象だ」、「……冬にツバメを見るなんて」と鳥類学の教授が橋を渡りながら言いました。それから教授は、このことについて長い投書を地方新聞にあてて書きました。みんながその投書を話題にしました。でも、その投書は人々が理解できない単語でいっぱいでした。「……今夜、エジプトに行きます」とツバメは言いました。ツバメはその予定に上機嫌でした。町中まちなかの名所をみな訪れてから、教会の尖塔せんとうのてっぺんに長い時間とまっていました。ツバメが行くところはどこでもスズメがチュンチュン鳴いていて、「……素敵な旅人ね」と口々に言っていましたので、ツバメはともうれしくなりました。

月がのぼると、ツバメは幸福の王子のところに戻ってきました。「……エジプトに何かことづけはありますか」と声をあげました。「……もうすぐ出発しますから」、「……ツバメさん、ツバメさん、小さなツバメさん」と王子は言い、「……もう一晩泊まってくれませんか」と言うのでした。すると、「……私はエジプトに行きたいと思っています」とツバメは答えました。「……明日僕の友達ともだちは川を上り、二番目の滝へ飛んでいくでしょう。そこではバピルスのしげみの間でカバが休んでいます。そして巨大な御影石みかげいしの玉座にはメムノン神が座まっているんです。メムノン神は、星を一晩中見つめ続け、明けの明星が輝くと喜びの声をひびこあげ、そしてまた沈黙に戻ると言われています。正午には黄色のライオンが水辺に水を飲みひとこにやっています。ライオンの目は緑りよくちゆう柱石ちゆういしのようで、その吠え声は滝のごうごうという音よりも大きいんですよ」と言うのでした。

「……ツバメさん、ツバメさん、小さなツバメさん」と王子は言いました。「……ずっと向こう、町の反対側にある屋根裏部屋に若者の姿が見える。彼は紙であふれた机にもたれている。傍らにあるタンブラーには、枯れたスマイレが一束刺してある。彼の髪は茶色で細かく縮れ、唇はザクロのように赤く、大きくて夢見るような目をしている。彼は劇場の支配人のために芝居を完成させようとしている。けれど、あまりにも寒いのもう書くことができないのだ。暖炉の中には火の気はなく、空腹のために気を失わんばかりになっている」と言うのでした。

すると、「……もう一晩、あなたのとこりに泊りましょう」と、よい心をほんとうに持っているツバメは言いました。そして、「……もう一つルビーを持っていきましょか」と言うのと、「……ああ！ もうルビーはないのだよ」と王子は言いました。「……残っているのは私の両目だけだ。私の両目は珍しいサファイアでできている。これは一千年前にインドから運ばれてきたものだ。私の片目を抜き出して、彼のところまで持っていっておくれ。彼はそれを宝石屋に売って、食べ物と薪を買って、芝居を完成させることができるだろう」と言うのと、「……王子様」とツバメは言い、「……私にはできません」、そしてツバメは泣き始めました。「……ツバメさん、ツバメさん、小さなツバメさん」と王子は言いました。「……私が命じたとおりにしておくれ」と言うので、そこでツバメは王子の目を取り出して、屋根裏部屋へ飛んでいきました。屋根に穴があいていたので、入るのは簡単でした。ツバメは穴を通ってさっと飛び込み、部屋の中に入りました。その若者は両手の中に顔をうずめるようにしておりましたので、鳥の羽ばたきは聞こえませんでした。そして若者が顔を上げると、そこには美しいサファイアが枯れたスマイレの上に乗っていたのです。

「……私も世の中に認められ始めたんだ」と若者は大声を出しました。「……これは誰か、熱烈なファンからのものだな。これで芝居が完成できるぞ」と若者はとても幸福そうでした。

#### 六、マツチ売りの少女のとこりに王子の眼のもう一つのサファイアを運ぶ

次の日、ツバメは波止場へ行きました。大きな船のマストの上にとまり、水夫たちが大きな箱を船倉からロープで引きずり出すのを見ました。箱が一つ出るたびに「……よいこらせー！」と水夫たちは叫びました。「……僕はエジプトに行くんだよ！」とツバメも大声を出しましたが、誰も気にしませんでした。月が出るとツバメは幸福の王子のとこりに戻りました。「……おいとまごいにやってきました」とツバメは声をあげました。

するとまた、「……ツバメさん、ツバメさん、小さなツバメさん」と王子は言いました。「……もう一晩泊まってくれませんか」と言うので、「……もう冬です」とツバメは答えました。「……冷たい雪がまもなくここにも降るでしょう。エジプトでは太陽の光が緑のシュロの木に温かく注ぎ、ワニたちは泥の中に寝そべってのんびり過ごしています。友人たちは、パールベック寺院の中に巣を作っており、ピンクと白のハトがそれを見て、クーターと鳴き交わっています。王子様。僕は行かなくちゃなりません。あなたのことは決して忘れません。来年の春、僕はあなたがあげてしまった宝石二つの代わりに、美しい宝石を二つ持って帰ってきます。ルビーは赤いバラよりも赤く、サファイアは大海のように青

いものになるでしょう」と言うのです。

すると、「……下のほうに広場がある」と幸福の王子は言いました。「……そこに小さなマツチ売りの少女がいる。マツチを溝に落としてしまい、全部駄目になってしまった。お金を持って帰れなかったら、お父さんが女の子をぶつだろう。だから女の子は泣いている。あの子は靴も靴下もはいていないし、何も頭にかぶっていない。私の残っている目を取り出して、あの子にやってほしい。そうすればお父さんからぶたれないだろう」と言うのです。するとまた、「……もう一晩、あなたのところに泊まりましょう」とツバメは言いました。「……でも、あなたの目を取り出すなんてできません。そんなことをしたら、あなたは何も見えなくなってしまう」と言う。すると、「……ツバメさん、ツバメさん、小さなツバメさん」と王子は言いました。「……私が命じたとおりにおくれ」と言うので、そこでツバメは王子のもう片方の目を取り出して、下へ飛んでいきました。そして、ツバメはマツチ売りの少女のところまでさっと降りて、宝石を手の中に滑り込ませました。すると、「……まあ、ガラス玉!」とその少女は言いました。そして笑いながら走って家に帰りました。

\*

\*

それからツバメは王子のところに戻りました。「……あなたはもう何も見えなくなりました」とツバメは言いました。「……だから、ずっとあなたと一緒にいることにします」と言うので、「……いや、小さなツバメさん」とかわいそうな王子は言いました。「……あなたはエジプトに行かなくちゃいけない」と言うので、「……僕はずっとあなたと一緒にいます」とツバメは言いました。そして王子の足元で眠りました。

次の日一日、ツバメは王子の肩に止まり、珍しい土地で見えたたくさんのお話をしました。ナイル川の岸沿いに長い列をなして立っていて、くちばしで黄金の魚を捕まえる赤いトキの話。世界と同じくらい古くからあり、砂漠の中に住んでいて、何でも知っているスフィンクスの話。琥珀のロザリオを手にして、ラクダの傍らをゆっくり歩く貿易商人の話。黒檀のように黒い肌をしており、大きな水晶を崇拜している月の山の王の話。シユロの木で眠る緑の大蛇がいて二十人の僧侶が蜂蜜のお菓子を食べさせている話。広く平らな葉に乗って大きな湖を渡り、蝶といつも戦争しているピグミーの話。

「……可愛い小さなツバメさん」と王子は言いました。「……あなたは驚くべきことを聞かせてくれた。しかし、苦しみを受けている人々の話ほど驚くべきことはない。度しがたい悲しみ以上に解きたい謎はないのだ。小さなツバメさん、町へ行っておくれ。そしてあなたの見たものを私に教えておくれ」と言うのです。

## 七、王子の体の純金を一枚一枚はがして貧しい人たちのところに運ぶ

ツバメはその大きな町の上を飛びまわり、金持ちが美しい家で幸せに暮らす一方で、乞食がその家の門の前に座っているのを見ました。暗い路地に入っていく、ものうげに黒い道を眺めている空腹な子供たちの青白い顔を見ました。橋の通りの下で小さな少年が二人、互いに抱き合って横になり、暖め合っていました。「……お腹がすいたよう」と二人は口にしていましたが、「……ここでは横になってはいかん」と夜警が叫び、二人は雨の中へとさまよい出ました。

それからツバメは王子のところへ戻って、見てきたことを話しました。すると、「……私の体は純金で覆おほわれている」と王子は言い、そして、「……それを一枚一枚はがして、貧しい人にあげなさい。生きている人は、金があれば幸福になれるといつも考えているのだ」と言うのでした。

ツバメは純金を一枚一枚はがしていき、とうとう幸福の王子は完全に輝きを失い、灰色になってしまいました。ツバメが純金を一枚一枚貧しい人に送ると、子供たちの顔は赤みを取り戻し、笑い声をあげ、通りで遊ぶのでした。「……パンが食べられるんだ！」と大声で言いました。

やがて、雪が降ってきました。その後わとに霜が降りました。通りは銀でできたようになり、たいそう光り輝いておりました。水晶のような長いつらが家ののきから下がり、みんな毛皮を着て出歩くようになり、子供たちは真紅の帽子をかぶり、氷の上でスケートをしました。かわいそうな小さなツバメにはどんどん寒くなってきました。でも、ツバメは王子の元を離れようとはしませんでした。心から王子のことを愛していたからです。パン屋が見ていない時、ツバメはパン屋のドアの外でパン屑くずを拾い集め、翼をばたばたさせて自分を暖あためようとしてました。

でも、とうとう自分は死ぬのだとわかりました。ツバメには、王子の肩までもう一度飛びあがるだけの力しか残っていませんでした。「……さようなら、愛する王子様、あなたの手にキスをしてもいいですか」とツバメはささやくように言いました。すると、「……あなたがとうとうエジプトに行くのは、私もうれしいよ、小さなツバメさん」と王子は言いました。「……あなたはここに長居しすぎた。でも、キスはくちびるにしておくれ。私もあなたを愛しているんだ」と言うと、「……私はエジプトに行くのではありません」とツバメは言いました。「……死の家に行くんです。『死』というのは『眠り』の兄弟、ですよね」と言いながら、ツバメは幸福の王子のくちびるにキスをして、死んで彼の足元に落ちていきました。

その瞬間、像まがの中で何かなにかが砕けたような奇妙な音がしました。それは、鉛の心臓がちょうど二つに割れた音なのでした。ひどく寒い日でしたから。

#### 八、翌朝、市長や市会議員たちが「幸福の王子の像」を見てみると……

次の日の朝早く、市長が市会議員たちと一緒に、像の下の広場を歩いておりました。柱を通り過ぎる時に市長が像を見上げました。「……おやおや、この幸福の王子は何てみすぼらしいんだ」と市長は言いました。「……何てみすぼらしいんだ」と市会議員たちも叫びました。彼らはいつも市長に賛成するのです。皆は像を見ようと近寄っていききました。そして、「……ルビーは剣から抜け落ちてるし、目は無くなってるし、もう金の像じゃなくなっているし」と市長は言いました。「……これでは乞食こじきとたいして変わらんじやないか」と言うと、「……乞食こじきとたいして変わらんじやないか」と市会議員たちも言いました。「……それに、死んだ鳥なんか足元にいる」と市長は続けました。「……われわれは実際、鳥類はここで死ぬことあたわずという布告を出さねばならぬ」と言うと、そこで書記がその提案を書きとめました。

そこで彼らは幸福の王子の像を下ろしました。「……もう美しくないから、役にも立た

ないわけだと大学の芸術の教授が言いました。そして、溶鉱炉で像を溶かす時に、その金属を使ってどうするかを決めるため、長は市議会を開きました。「……もちろん他の像を立てなくてはならない」と市長は言いました。「……そしてその像は私の像でなくてはならない」と言うと、「……いや、私の像です」と市会議員たちがそれぞれ言い、口論になりました。私が彼らのうわさを最後に聞いた時も、まだ口論していました。

九、天使は、神さまのところに鉛の心臓と死んだ鳥を持ってきました

「……おかしいなあ」と鑄造所の労働者の監督が言いました。「……この壊れた鉛の心臓は溶鉱炉では溶けないぞ。捨てなくちゃならんな」と、心臓は、ごみ溜めに捨てられました。そこには死んだツバメも横たわっていたのです。

神さまが天使たちの一人に「……町の中で最も貴いものを二つ持ってきたきさい」とおっしゃいました。その天使は、神さまのところに鉛の心臓と死んだ鳥を持ってきました。神さまは「……よく選んできた」とおっしゃいました。「……天国の庭園でこの小さな鳥は永遠に歌い、黄金の都でこの幸福の王子は私を賛美するだろう」と言うのでした。(完)

\*

\*

さて、この作品の主旨は、「……二人の肉体は滅んでしまつたが、しかし、その魂は新たに天国に生まれ変わり、そして、そこで永遠の『生命と幸福』を得たということ」である。ところで、その像は、なぜ「幸福の王子」と呼ばれていたのかと言えば、それは、次のようなことである。つまり、「……まだ私が生きていて、人間の心を持っていた時のことである」が、「……私は涙というものがどんなものか知らなかった。というのは私はサンスーシの宮殿に住んでいて、そこには悲しみが入り込むことはなかったからだ。昼間は友人たちと庭園で遊び、夜になると大広間で先頭切つてダンスを踊つたのだ。庭園の周りにはとても高い塀がめぐらされていて、私は一度もその向こうに何があるのかを気がつけたことがなかった。周りには、非常に美しいものしかなかった。廷臣たちは私を幸福の王子と呼んだ。実際、幸福だつたのだ。もしも快樂が幸福だというならば。私は幸福に生き、幸福に死んだ。死んでから、人々は私をこの高い場所に置いた。ここからは町のすべての醜悪なこと、すべての悲惨なことが見える。私の心臓は鉛でできているけれど、泣かすにはいられないのだ」と言うのでした。

これは、有名な「釈迦」の境遇によく似ていて、釈迦という人は、シャカ族の王子として、何不自由ない恵まれた環境に生まれつき、確かに、生後七日で母親を亡くしてはいるが、十六歳の時には、美しい女性と結婚をして、一子(男の子)にも恵まれ、この俗世間で味わえる「幸せや楽しみ」などは、二十九歳までには、ほとんどすべて味わい尽くしていたということである。つまり、山ほどの美味しい料理を食べること。目も眩むほどの様々な物に充ちた豪邸に住むこと。様々な豪華な衣装や装飾品などで身を飾り立てること。家族に恵まれること。ハーレムのような生活を送ること。芸術や芸能その他などを楽しむこと。社会的な地位を得ること。人から尊敬されること。容姿・容貌に恵まれること。欲しいものは、何でも手に入るような環境、その他、そのような俗世間で味わえる「幸せや楽しみ」などは、すべて、少なくとも一通りは「体験・経験」していたということである。それゆえ、ふつうに考えれば、この上もなく幸せな人ということになるかと思うが、

しかし、釈迦自身は、結局は、それらのどれにも満足できなかった。つまり、釈迦の「魂」そのものは、真に満たされることはなかったということである。

そこで、釈迦は、自分の「魂」そのものを、うそ偽りなく、ほんとうに深く満たしてくれるものにめぐり逢いたいということから、いわゆる「出家」をしたということである。それは、例えば、空海なども、釈迦と全く同じように、凄まじいほどの「心の渇き」から、まさに凄まじいまでの「修行」を行なっているが、それも、結局は、自分の「魂」そのものが、うそ偽りなく、ほんとうに深く満たされることを、心の底から願ったということである。そして、われわれ人間の「魂」そのものが、うそ偽りなく、ほんとうに深く満たされる地点というのは、一体、どういう地点かと問えば、それこそは、まさに「悟り」の地点に他ならないということである。

\*

\*

例えば、「修行」というのは、いったい何のために行なわれるのかと問えば、小乗仏教においては、いわゆる「悟り」を得んがためのものである。それでは、その「悟り」とは、一体、何かと問えば、それは、本来の「大空のような無色透明な心」を取り戻すということである。それは、一体、どういうことかと言えば、それは、次のようなことである。

つまり、われわれ人間の「心」そのもの、というのは、本来は、「大空のような無色透明な心」であるにもかかわらず、俗世間のなかで日々あわただしく生活をしているために、われわれ人間の「心」というのは、どうしても実に様々な「欲望や感情」などに振りまわされてしまい、本来は、「大空のような無色透明な心」であるにもかかわらず、実に様々な「変形」(変色) してしまっているのである。しかも、その実に様々な「変形」(変色) してしまっただけで、「心」を以って、つまり、実に様々な「欲望や感情」などに振りまわされている「心」を以って、あれこれ無分別に「行動」(言動) するからこそ、自分に対しても、また、他人に対しても、あるいは、社会や国家などに対しても、実に様々な「禍」(不幸) をもたらしている最大の要因になっているのである。

それでは、その本来の「大空のような無色透明な心」を取り戻すためには、いったいどうしたらよいかと言えば、その「一つの方法」が、まさに宗教における「修行」になるということである。例えば、なぜ、「俗世間」から離れるのかと言えば、「俗世間」のなかにいたのでは、どうしても実に様々な「欲望や感情」などに振りまわされてしまい、いつまで経っても、本来の「大空のような無色透明な心」を取り戻すことは、なかなか出来にくい。そこで、その「俗世間」からしばらく離れて、いわゆる「山の中」に籠もって、俗世間のなかで日々あわただしく生活していたために、実に様々な「変形」(変色) してしまっただけから、本来の「大空のような無色透明な心」を取り戻そうとするための「努力」こそは、まさに宗教における「修行」になるのである。

\*

\*

それでは、その「悟り」の地点とは、一体、どういう世界かと問えば、それは、まさに「大空のような無色透明な心」の状態になるとともに、いわゆる「三つの収穫」を得ることにもなるのである。——一つは、「心の眼」が開けて、人間や様々な物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などをどこまでも厳密に探究でき得るようになる。一つは、「愛」を内に宿すことによって、今までの本能に深く根ざした「価値観や道徳観」から、より開かれた「価値観や道徳観」へと移行することになる。そして、もう一つは、真に叡知が働き始めて、物

事の「真偽、善悪、美醜、価値」判断等もどこまでも厳密にでき得るようになるということである。そして、この「三つの収穫」を以って、「現実界」をその人なりに生きていくことになるかと思うが、それが、すなわち、生きながら「涅槃の境地」を楽しむということになるのである。

\*

\*

わがままな大男  
(オスカー・ワイルド)

## 目次

オスカー・ワイルドの世界

わがままな大男

- 一、子供たちが自分の庭で勝手に遊ぶのを大男は怒っていた
- 二、春が来ても、わがままな大男の庭だけは冬のままでした
- 三、ある朝、大男が目を覚ますと美しい音楽が聞こえてくる
- 四、大男は今まで自分のしてきたことを心から後悔し改心する
- 五、それから何年も経<sup>た</sup>って大男はたいへん年老い体も弱くなる

※ 参考文献

わがままな大男

(オズカー・ワイルド)

一、子供たちが自分の庭で勝手に遊ぶのを大男は怒っていた

子供たちは毎日、午後になって学校から帰ってくると、大男の庭に行つて遊ぶのが常でした。そこは、柔らかい緑の草が生えた、広くて素敵な庭でした。草むらのあちこちには、星に似た美しい花が咲いていますし、また、その庭には十二本の桃の木があり、春になると薄桃色と真珠色の繊細な花があふれるように咲き、秋には豊かな果実が実ります。鳥たちは木々の上でたいそう甘い歌声を響かせるので、子供たちは遊ぶのをやめて聞き入るのでした。「……ここで遊ぶのはなんて楽しいことだろう」と、くちぐちに声をあげました。

ある日、大男が帰ってきました。彼はコーンウォールに住む鬼の友人を訪問し、そこで七年間いっしょに過ごしていました。七年が過ぎ、話したいことは全部話したし、もう話題もなくなってきたので、自分の城に帰ろうと思ったのです。大男が戻ると、子供たちが庭で遊んでいるのが見えました。「……おまえたち、ここで何をしている？」と、大男が大きなどら声で叫んだので、子供たちは逃げていきました。

「……わしの庭はわしの庭だ」と大男は言いました。「……誰だつてそんなことはわかつている。この庭ではわしの他に誰にも遊ばせないぞ」と思い、それで大男は庭のまわりに高い壁をめぐらせて立て札を立てました。——『立ち入る者には罰を与える』——大男はとてもわがままだったのです。

二、春が来ても、わがままな大男の庭だけは冬のままでした

かわいそうなことに、子供たちには遊ぶところがなくなっていました。道路で遊ぶうとしてみましたが、道路はともごみごみしていて、かたい石ころがいっぱいあって、好きになれませんでした。学校が終わると、子供たちは高い壁のまわりをうろろして、中の美しい庭のことを話し合いました。「……あそこで遊ぶことはなんて楽しかったことだろう！」と、くちぐちに言いました。

やがて春が来ました。国中に小さな花が咲き、小鳥たちがあふれました。わがままな大男の庭だけが、まだ冬でした。子供たちがいなくなかったので、鳥たちは歌いたいと思ひませんでしたし、木々は花を咲かせるのを忘れてしまいました。ある時、美しい花が一輪、草むらから頭をもたげましたが、立て札を見て、子供たちがかわいそうになり、地面の中にまたもぐりこんで、眠ってしまいました。喜んだのは雪と霜だけでした。「……春はこの庭のことを忘れちゃったんだ」と二人は声をあげました。「……だから一年中ここに住もうぜ」と雪は大きな白い外套で草を覆い、霜は木々をすっかり銀色に塗りつぶしました。それから二人が北風にいっしょに住もうと言ったので、北風がやって来ました。彼は毛皮をまとい、庭で一日中吠えたけり、煙突の煙出しを吹き飛ばしました。「……ここは居心地がよい場所だ。……霰にも来るように言わなくちゃな」と彼は言いました。そして、霰もやってきました。毎日三時間、霰は城の屋根をがたがたいわせ、とうとう屋根をふいたスレートをほとんど壊してしまいました。それから霰は出来る限りの速さで庭のまわ

りをぐるぐる走りまわりました。霰あられは灰色の服で、吐く息は氷のようでした。

さて、「……どうして春が来るのがこんなに遅いのだ」と、窓際まじぎわに座り、白く冷たい庭を見ながら、わがままな大男は言いました。「……天気が変わってほしいものだ」、しかし春はまったくやって来ませんでした。夏も来ません。秋が来ると、どこの庭にも黄金の果実みのが実りましたが、大男の庭ではまったく実りがありませんでした。「……この大男はわがまますぎるんですもの」と秋は言いました。ですからこの庭はいつでも冬で、北風と、霰あられと、霜しもと、雪ゆきが木々の間あいだで舞い踊っていました。……

三、ある朝、大男が目を覚ますと美しい音楽が聞こえてくる

ある朝、大男がベッドで目を覚ますと、美しい音楽が聞こえてきました。それはあまりにも耳に甘い響きひびでしたので、これは王宮の楽団が通りかかったのに違いないと大男は思いました。実は小さなベニヒワが窓の外で歌っていただけなのですが、庭で鳥がさえずるのを大男が耳にしなくなつてからあまりにも長い時間が過ぎたので、大男の耳には鳥の音が世界で最も美しい音楽のように聞こえたのです。やがて、霰あられは頭上で踊るのをやめ、北風も吹えるのをやめました。そして、開いた窓から、かぐわしい香りが大男の方にやってきました。「……やつと春が来たのに違いない」と大男は言いました。そしてベッドから飛び起きて外を見ました。

さて、何が見えたでしょうか？ 最高に素晴らしい眺めながでした。子供たちが壁の小さな穴を通りぬけて入り込み、木の枝の上に座すわっているのです。それぞれの木に小さな子供が乗っているのが見えました。木々は子供たちが戻ってきたので大喜びで、自分の体を覆おほい尽くすほど花を咲かせ、子供たちの頭の上でやさしく腕を振っていました。鳥たちは飛び交い、喜びにさえずり、花は緑の草むらから頭を出して笑っていました。それはうるわしい情景でした。ただ一箇所だけがまだ冬でした。それは庭の一番向こうの角すみで、そこに小さな男の子が立っていました。その子はとても小さく、木の枝まで届きません。ひどく泣きながら、木のまわりをぐるぐると回っています。かわいそうな木は、まだ霜しもと雪ですっかり覆おほわれ、北風はその上を吹き荒れていました。「……のぼって！ ぼうや」とその木は言い、枝をできるだけ曲げて下ろしました。でも、その子は背が低くてどうしても届かなかったのです。

四、大男は今まで自分のしてきたことを心から後悔し改心する

外を見ているうちに大男の心は雪が解けるように和らやわぎました。「……わしはなんてわがままだったんだ！」と大男は言いました。「……春がなぜここに来ようとしなのか、そのわけが今わかった。あのかわいそうな小さな男の子を木の上に上げよう。そして壁かべをたたきこわそう。そうすればわしの庭は永遠に子供たちの遊び場所になるだろう」と思い、大男は今まで自分のしてきたことを本当に後悔したのです。

そこで大男はそつと階段を降り、静かに正面の扉とびらを開け、庭に入りました。しかし大

男を見ると、子供たちは恐くなって走って逃げてしまい、庭はまた冬に戻ってしまいました。小さな男の子だけが走りませんでした。目に涙がいっぱい、大男が来るのが見えなかったからです。大男は忍び足でその子の後ろにまわり、抱き上げると木に乗せてあげました。すると、木にはいっぺんに花が咲き乱れ、鳥がやってきて歌を歌いました。小さな男の子は、伸ばした両腕を大男の首にまわし、キスしました。他の子供たちも、大男がもう意地悪ではないとわかり、走って戻ってきました。子供たちとともに春も戻ってきました。「……この庭は、もうおまえたちのものだよ、かわいい子供たち」と大男は言い、大きな斧を取ると、壁をたたきこわしました。人々が十二時に市場に行く時、これまで誰も見たこともないほど美しい庭で、大男が子供たちといっしょに遊んでいるのが見えました。

\*

\*

一日じゅう子供たちは遊び、夕方になるとみんなは大男のところにはさようならを言いやってきました。「……でも、あの小さな友達はどこにいるんだい」と大男は尋ねました。「……わしが木に乗せてやった子は？」とキスをしてくれたから、大男はあの子が一番好きだったのです。「……知らないよ」と子供たちは答えました。「……いなくなっちゃったんだ」、「……明日、絶対ここにくるように言ってくれないか」と大男は言いました。しかし子供たちは、その子がどこに住んでいるのか知らないし、これまで一度も会ったことがないんだ、と言いました。それで大男はとても悲しい気持ちになりました。

毎日、午後になって学校が終わると、子供たちはやってきて大男と遊びました。でも、大男が一番好きだった小さな男の子は二度と現れませんでした。大男は子供たちみんなにとっても親切でした。しかし、大男は自分の初めての小さな友にとっても会いたいと思い、あの子のことをたびたび口にしていました。「……あの子に会いたいものだ！」と大男はよく言っていました。

五、それから何年も経って大男はたいへん年若い体も弱くなる

それから何年も経ち、大男はたいへん年若い、体も弱くなりました。もう遊ぶことはできませんでしたから、大きな脇掛椅子に座り、子供たちが遊んでいるのを見、庭を楽しんでいました。「……ここには美しい花がたくさん咲いている」と大男は言いました。「……しかし、子供たちが何よりも美しい花だ」と思うのでした。

\*

\*

ある冬の朝、大男は服を着ながら窓の外を見ました。いまでは大男は冬を憎んではいませんでした。春は眠っており、花は休んでいるだけだ、とわかったからです。突然、大男は驚いて目をこすり、何度も何度も見なおしました。それはまことに素晴らしい眺めでした。庭の一番向こうの角に愛らしく白い花ですっかり包まれた木が一本ありました。枝はすべて黄金で、銀色の果実が垂れ、その下に大男が愛していた小さな男の子が立っていたのです。——大きな喜びに包まれ、大男は階段を駆け降り、庭へ飛び出しました。草むらを走り抜け、その子のそばへやって来ました。すぐ近くまで来ると、大男は怒りで顔を赤くして言いました。「……いったい誰がそのような傷を負わせたのだ？」と。というのも、その子の両方の手のひらには釘の跡があり、小さな両足にも釘の跡があったからです。

「……いったい誰がそのような傷を負わせたのだ？」と大男は叫びました。「……教え

てくれ。わしが大きな剣でそいつを殺してやるから」と言うと、「……そうではない！」と、その子は答えました。「……これは愛の傷なのだよ」と言うので、「……あなたはどなたですか？」と大男は言いました。すると大男は、不思議な「畏怖の念」に襲われ、その小さな子の前にひざまずきました。

その子は大男に微笑みかけ、こう言いました。「……かつて、あなたはこの庭で私を遊ばせてくれた。今日は、あなたがわたしの庭へいっしょに来るのだ。わたしの庭、パラダイスへ」と言うのでした。

その日の午後、子供たちが走りこんで来てみると、木の下で大男は、全身を白い花でおわれて死んでいるのでした。(完)

\*

\*

さて、わがままだった大男は、自分の愚かな言動を心から悔い改めることで、新たな善良な人間へと生まれ変わるという内容の作品かと思うが、それは、有名な宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』という作品の中に出て来る「蠍の火」の喩えにも共通するものではないかと思う。それは、次のような内容のものである。

まず、蠍は、自らの「尾の毒」で小さな虫やその他を殺して食べて生きてきた。それは、あまりにも当たり前前のことであり、それゆえ、そのことに何の「疑問も疑い」も抱かなかった。それは、あまりにも当然のことだからである。ところが、ある日、自分が「食べられる」(つまり「殺される側」)に立った時、初めて、はっきりと気づいたのである。それは、まさに「殺される」ということ、その殺されるという「恐怖」というものがどれほどのものであるか、また、その時の「心の痛み」というものがどれほどのものであるかを、初めて、わが身を以ってはっきりと実感したのである。自分は、何も知らなかった。これほどの「恐怖」と「心の痛み」とを伴うものだとは。ああ、想像ば、自分は、どれほど数多くの「生命」を、また、どれほど数多くの「他の心」を傷つけて来たかも知れない。それは、何も蠍だけではなく、われわれ人間も全く同じことであり、実に数多くの「動植物」たちの「生命」を、また、どれほど数多くの「人間の心」を傷つけて生きて来たかも知れない。人間とは、何と「罪深い存在」なのだろうか！ そういう「思い」に深く襲われた時に、初めて、その人の「頭の中」(或いは「心の中」)に、まさに「罪の意識」(或いは「良心の呵責」)というものが、うそ偽りなく、はっきりと生じて来るのである。そして、その「罪の意識」(或いは「良心の呵責」)というものが、その人の「頭の中」(或いは「心の中」)にはっきりと生じて来た時に、初めて、今までの「無自覚」な自分から、はっきりと「自覚」を持った人間へと大きく生まれ変わる可能性が生じて来るのである。それまでは、その人の「頭の中」(或いは「心の中」)が真に大きく変わるといようなことは、恐らく、極めて難しいことになるのだろう。

つまり、今までの自分は、目の前の実に様々な「欲望や感情」などに振りまわされてしまい、それらをただひたすら「貪欲」に追い求めるばかりで、自分のことしか考えてはいなかった。そのために、どれほどの「人間の心」を傷つけてきたかも知れない。もちろん、自分自身も、多かれ少なかれ、傷ついているのである。人間とは、何と「罪深い存在」なのだろうか！ そういう「罪の意識」(或いは「良心の呵責」)からの「自覚」であり、そのようなはっきりとした「自覚」からこそ、今までのような目の前の実に様々な「欲望や感情」などをただひたすら貪欲に追い求めて満たすだけの「生き方」ではなく、むしろ、

人や社会のためにもなるような「生き方」をしてみたいというような想いが生じて来るのである。それが、まさに「蠅ハエトリの火」の譬たとえでもあるということである。

\*

\*

オー・ヘンリーの世界  
(有名な短編集)

目次

オー・ヘンリーの世界  
(有名な短編集)

- 一、最後の一枚
- 二、賢者の贈り物

※ 参考文献

最後の葉

(オー・ヘンリー)

## 目次

### オー・ヘンリーの世界

#### 最後の葉

- 一、ある地区に絵描きたちが集まってきて「芸術家村」ができあがった
- 二、肺炎と呼ぶ冷酷な侵略者が芸術家村にも入りジョンジーを襲った
- 三、医者に診てもらおうとジョンジーの助かる見込みは十に一つだと……
- 四、挿絵を描き始めると低い声で数を逆に数えているのが聞こえて来る
- 五、生きる希望を失っているジョンジーにそんな馬鹿な話はないと怒る
- 六、ベアマン老人はスーたちの下の一階に住んでいる絵描きであった
- 七、激しい雨と風が夜の間荒れ狂ったのにつたの葉は一枚だけ残った……
- 八、この作品がなぜ真に名作と呼ばれるかの所以がこの章に記されている

#### ※ 参考文献

## 最後の一片

(オー・ヘンリー)

一、ある地区に絵描きたちが集まってきて「芸術家村」ができあがった

ワシントン・スクエアの西側の狭い地区では、街路が気が狂ったように錯綜さくそうしていて、いくつもの「プレイス」という名のついた短い通りに寸断すんだんされている。しかも、この「プレイス」が妙な角度で曲がったり、彎曲わんきよくしたりしているのです。街路は結局ふり出しに戻って、一度や二度はもと来た道をまた横断することになる。昔ある絵描きがこの通りに一つの貴重な可能性を発見した。それは「絵具や紙やカンヴァスの代金」の集金人も、この通りに入り込んだら、あきらめて帰るのではなからうか？ 借金の一セントも取り立てることもできずにね。

そんな次第で、やがて一風変わった古めかしいグリニッチ・ヴィレッジ地区に絵描きたちがうろろろ集まってきて、北向きの窓とか、十八世紀の破風造りの家とか、オランダ風建築の屋根裏部屋とか、安い貸室かししつとかを探し始めた。それから六番街から何個かのしろめ製せい(スズを主成分とする合金)のジョッキや一、二個の卓上用のコンロなどを持ち込んで、こうして「芸術家村」ができあがったのです。

二、肺炎と呼ぶ冷酷な侵略者が芸術家村にも入りジョンジーを襲った

ズんぐりした三階建ての煉瓦造りの最上階では、スーとジョンジーは共同でアトリエを持っていた。「ジョンジー」というのはジョアンナの愛称であるが、スーはメイン州の出身であり、ジョンジーはカリフォルニア州の出身であった。二人は八番街の「デルモニコ」食堂の定食を食べている時に出会い、芸術やチコリー・サラダやビシヨップ・スリーブ型ドレスの趣味などが一致するのを知って、共同のアトリエを持つことになったのです。

さて、それ(肺炎の流行の始まり)は五月のことでした。そして、十一月に入ると、医者いしやが肺炎と呼ぶ目に見えない冷酷な侵略者がこの芸術家村にも歩き回って、氷のような手であちこちの人間に触れた。反対側の東地区では(すでに)この狼藉者ろうじやくしやは傍若無人ぼうじやくぶじんにのし歩いて、手あたり次第に殴りかかって何十人という犠牲者を出した。だがこの狭苦しい苔こけむした「プレイス」の迷路地帯では、さすがに彼の足取りは鈍にぶかった。

肺炎氏(菌)は騎士的な老紳士とは呼べるような手合いではなかった。息は荒く、血にまみれた手を持った年寄りのこの悪質な(肺炎菌)が、カリフォルニアのそよ風で血の気の薄くなっている小柄こがらの小娘を相手に取るなどはとても正々堂々せいせいどうどうとは言えないが、しかし肺炎氏(菌)はジョンジーに(容赦なく)襲いかかった。彼女は寝込んでしまい、ペンキを塗った鉄のベッドの上で動けなくなった。そして、オランダ風の小さな窓ガラス越しに隣りの煉瓦造りの建物の何もない壁かべを見ているだけになってしまった。

三、医者いしやに診てもらおうとジョンジーの助かる見込みは十に一つだと……

ある朝、灰色の濃い眉まゆをした多忙な医者がスーを廊下に呼び出した。「……助かる見込

みは、そう、十に一つですな」と、医者は、体温計の水銀を振り下げながら言った。「……で、その見込みはあの子が『生きたい』と思うかどうかにかかっている。こんな風に葬儀屋の側につきたがっているのは、どんな薬でもばかばかしくなってしまう。あのお嬢さんは、自分はよくならない、と決めている。あの子が何か心にかけていることはあるかね？」と聞くと、「……あの子は、——いつかナポリ湾を描きたいって言ってたんです」とスーは応えた。「……絵を描きたいって？ ふむ、もっと倍くらい実のあることは考えていないのかな？ 例えば男のこととか」と聞くと、「……男？」とスーはユダヤ・ハーブの弦音みたいな鼻にかかった声で言った。「……男なんて——いえ、ないです。先生。そういう話はありません」と言うのでした。

「……ふむ、じゃあそこがネックだな」と医者は言った。「……わたしは、自分の力のおよぶ限りのこと、科学ができることはすべてやるつもりだ。でもね、患者が自分の葬式に来る車の数を数え始めたら、薬の効き目も半減なんですよ。もしもあなたがジョンジーに、冬にはどんな外套の袖が流行るのか、なんて質問をさせることができるなら、望みは十に一つから五に一つになるって請け合えるんですがね」と言うのでした。

医者が帰ると、スーは仕事部屋に入って日本製のナフキンがぐしゃぐしゃになるまで泣きました。やがてスーはスケッチブックを持ち、口笛でラグタイムを吹きつつ、胸を張ってジョンジーの部屋に入っていました。——ジョンジーはシートをかけて横になっていました。しわ一つもシートに寄せることなく、顔は窓に向けたままでした。ジョンジーが眠っていると思い、スーは口笛をやめました。（この口笛は、自分の心の中をジョンジーに悟られないように、いかにも陽気な振りをして見せたと言うことである。）

#### 四、挿絵を描き始めると低い声で数を逆に数えているのが聞こえて来る

スーはスケッチブックをセットすると、雑誌小説の挿絵をペンとインクで描き始めた。——若い作家は雑誌に小説を書いて「文学の道」を切り開いていくように、若き画家は「芸術への道」を切り開くために、その挿絵を描かなければならなかった。スーは、主人公のアイダホ州のカウボーイに優雅な馬術ショー用の乗馬ズボンを着せ、片眼鏡をかけさせようとしていた。その時、低い声が数回繰り返して聞こえた。スーは急いでジョンジーのベットのそばに行った。……

ジョンジーは目を大きく開いていた。そして窓の外を見ながら数を数えて……逆順に数を数えていた。——「じゅうに」とジョンジーは言い、少し後に「じゅういち」と言った。それから「じゅう」、「く」と言い、それから「八つ」、「七つ」とほとんど同時に言った。——スーはいぶかしげに窓の外を見ました。何を数えているのだろうか？ そこには草もななく、わびしい庭が見えるだけで、煉瓦の家の何もない壁は二十フィート（約六メートル）も向こうなのです。根元が節だらけで腐りかかっている、とても、とても古いつたがその煉瓦の壁の中ほどまで這っていた。そして、冷たい秋の風はつたの葉に吹き付けて、もう裸同然となった枝は崩れかかった煉瓦にしがみついているのでした。

「……なあに？」とスーは尋ねました。「六」とジョンジーはささやくような声で言った。「……早く落ちてくるようになったわ。三日前は百枚くらいあったのよ。数えていると頭が痛くなるほどだったわ。でもいまは簡単。ほらもう一枚。もう残っているのは五枚

だけね」と言うので、「……なにが五枚なの？ スーちゃんに教えてちょうだい」と言う  
と、「……葉っぱよ。つたの葉っぱ。最後の一枚が散る時、わたしも一緒に行くのよ」  
―「……三日前からわかっていたの。お医者さんは教えてくれなかったの？」と言うので  
した。

#### 五、生きる希望を失っているジョンジーにそんな馬鹿な話はないと怒る

「……まあ、そんな馬鹿な話は聞いたことがないわ」とスーはとんでもないと文句を言  
うのでした。「……古いつたの葉っぱと、あなたが元気になるのと、どんな関係があるっ  
ていうの？ あなたは、あのつたをとでも大好きだったじゃない、おばかさんね。そんな  
しょうもないこと言わないでちょうだい。あのね、お医者さんは今朝、あなたがすぐによ  
くなる見込みは……えっと、お医者さんが言った通りの言葉で言えば、「……一に十だ」  
って言うのよ。それって、ニューヨークで電車に乗ったり、工事中のビルのそばを通るぐ  
らいしか危なくないってことよ。ほらほら、スープを少し飲んで。そしてこのスーちゃん  
をスケッチに戻らせてね。そしてスーちゃんは編集者にスケッチを売ってね、病気のベ  
ビー（貴方）にはポートワインを買ってね、はらべこの自分にはポークチョップを買える  
でしょ」と言うと、「……もう、ワインは買わなくていいわ」と目は窓の外に向けたまま、  
ジョンジーは言った。「……ほらまた一枚。そう、もうスープもいららないの。残りの葉は、  
たったの四枚。暗くなる前に最後の一枚が散るのを見たいな。そして私もさよならね」と  
言うのでした。

「……ジョンジー、ねえ」とスーはジョンジーの上にかがみ込んで言った。「……お願  
いだから目を閉じて、私の仕事が終わるまで窓の外を見ないって約束してくれない？ こ  
の絵は、朝までに出さなきゃいけないのよ。描くのに明かりがあるの。でなきゃ日よけを  
降ろしてしまうんだけど」と言うと、「……他の部屋では描けないの？」とジョンジーは  
冷たく尋ねるのでした。

「……あなたのそばにいたいのよ」とスーは答えた。「……それに、あんなつたの葉っ  
ぱなんか見てほしくないの」と言うと、「……終わったらすぐに教えてね」とジョンジー  
は言い、目を閉じ、倒れた彫像のように白い顔をしてじっと横になりました。「……最後  
の一枚が散るのを見たいの。もう待つのは疲れたし、考えるのにも疲れたし、自分がぎゅ  
っと握り締めていたものを放したいの。そしてひらひらっとうるさく行きたいのよ。あ  
の哀れで、疲れた木の葉みたいに」と言うのでした。

#### 六、ベアマン老人はスーたちの下の一階に住んでいる絵描きであった

「……もうおやすみなさい」とスーは言った。「……洞穴住まいの年とつた世捨て人の  
モデルになってもらうために、私は階下のベアマンさんと呼んでこなきゃいけないの。す  
ぐに戻ってくるわ。私が戻ってくるまで動いちゃだめよ」と言うのでした。

ベアマン老人はスーたちの下の一階に住んでいる絵描きでした。六十は越していて、ミ  
ケランジェロが掘ったモーゼのような髯を半獣神のような頭から小鬼の体の上にたらし  
める風情でした。ベアマンは芸術的には落伍者でした。四十年間、絵筆をふるってきまし

たが、芸術の女神の衣ころものすそに触れることすらできませんでした。傑作をものにするんだいつも言っていました。が、いまだかつて手をつけたことすらありません。ここ数年間は、ときおり商売や広告に使うへたな絵以外には、まったく何も描いていませんでした。時々、プロのモデルを雇やとうことのできない芸術家村の若い画家のためにモデルになり、わずかばかりの稼とぎを得ていたので。ジンをがぶがぶのみ、これから描く傑作について今でも語るのです。ジンを飲んでいない時は、ベアマンは気むずかしい小柄な老人で、誰であれ、気の弱い人間がいると手きびしく軽蔑し、そして、階上のアトリエに住んでいる二人の若い画家の番犬をもつて任じていた。

地階の薄暗い穴あなぐら倉のような部屋でベアマン老人はジンの匂いをふんぷんさせていました。片隅には何も描かれていないキャンバスが画架かに乗っており、二十五年の間、傑作の最初の一筆ひとが下ろされるのを待っていた。スーはジョンジーの奇妙な空想をベアマンに話しました。この世に対するジョンジーの関心がさらに弱くなったら、彼女自身、一枚の木の葉のように弱くもろくはらはらと散ってしまうのではないかと、スーはそんな恐れもベアマンに話しました。

ベアマン老人は、赤い目にはつきりと涙を浮かべて、そんなばかばかしい空想に軽蔑と嘲笑の大声を上げた。「……なんですと！」とドイツ訛なまりを丸出しにして彼は叫んだ。「……いったい葉っぱが何だというのだ！ つたの葉が散るから自分も死ぬだなんて、そんな馬鹿なことを考える人間がどこの世界にいるんだね、そんな話は聞いたこともないぞ。いや、あなたの馬鹿げた世捨て人のモデルなんかになってはいられないよ。なんであなたは黙ってそんな馬鹿げた考えをあの娘に持たせておくのかね。ああ、かわいいそうなミス・ジョンジー」と言うのです。

「……病気がひどくて、体も弱っているのよ」とスーは言いました。「……高熱のせいで、気持ちが落ち込んでいて、おかしな考えで頭がいっぱいなよ。えーえ、いいわよベアマンさん。もしも私のためにモデルになつてくれないなら、しなくて結構よ。でも、あなたはいやな老いぼれの——老いぼれのコンコンチキだわ」と言うのです。

「……あなたも女つてわけだ」とベアマンは叫びました。「……モデルにならぬと誰が言った？ いいかね。あなたと一緒に行くよ。三十分も前から、いつでもモデルになつてやると言おうとしていたんじゃないか。——ああ、ここは、ミス・ジョンジーのような善良な娘が病気で寝込むようなところではない。いつか傑作をわしが画いてやろう。そしてらみんなでどこかに引越そう。そうとも！ほんとに」と言うのです。

上の階に着いた時、ジョンジーは眠っていました。スーは日よけを窓のしきいまで引きおろし、ベアマンを別の部屋へ呼びました。そこで二人は恐る恐る窓の外をつたを見つめました。そして一言も声を出さず、しばし二人して顔を見合わせました。ひっきりなしに冷たい雨が降り続き、みぞれまじりになっていました。ベアマンは古びた紺くろのシャツを着て、岩の代わりにさかさにした大鍋なべに腰を下ろして、洞穴ほらあな住まいの世捨て人のモデルになったのです。

## 七、激しい雨と風が夜の間荒れ狂ったのにつたの葉は一枚だけ残った

次の朝、一時間ねむったスーが目を覚ますと、ジョンジーはどろんとした目を大きく開

いて、降ろされた緑の日よけを見つめていました。「……日よけをあげて、見たいの」とジョンジーはささやくように命じました。スーはしぶしぶ従いました。けれども、ああ、打ち付ける雨と激しい風が長い夜の間荒れ狂ったというのに、つたの葉が一枚、煉瓦れんがの壁に残っていました。それは、最後の一枚の葉でした。茎のつけねは深い緑で、ぎざぎざのへりは黄色がかっており、その葉は勇敢にも地上二十フィート（六尺）ほどの高さの枝に残っているのです。

「……これが最後の一枚ね」とジョンジーが言いました。「……昨晚のうちに散ると思っていたんだけど。風の音が聞こえていたのね。でも今日、あの葉は散る。一緒に、私も死ぬ」と言うので、「……ねえ、お願いだから」とスーは疲れた顔を枕の方に近づけて言いました。「……自分のことを考えないっていうなら、せめて私のことを考えて。私はどうしたらいいの？」と言うのでした。

でも、ジョンジーは答えませんでした。神秘に満ちた遠い旅立ちへの準備をしている魂こそ、この世で最も孤独なものなのです。死という幻想がジョンジーを強くとらえるにつれ、友人や地上とのきずなは弱くなっていくようでした。

昼が過ぎ、たそがれ時になっても、たった一枚残ったつたの葉は、壁をほう枝にしがみついております。やがて、夜が来るとともに北風が再び解き放たれる一方、雨は窓を打ち続け、低いオランダ風のひさしからは雨粒がぼたぼたと落ちていきました。

\*

\*

朝が来て明るくなると、ジョンジーは無慈悲にも日よけを上げるようにと命じました。つたの葉は、まだそこにありました。ジョンジーは横になったまま、長いことその葉を見ていました。やがて、スーを呼びました。スーはチキンスープをガスストーブにかけてかき混ぜているところでした。

「……わたしは、とても悪い子だったわ、スーちゃん」とジョンジーは言いました。「……何かが、あの最後の葉を散らないようにして、わたしが何て悪いことを思っていたか教えてくれたのね。死にたいと願うのは、罪なんだわ。ねえ、スープを少し持ってきて、それから中にワインを少し入れたミルクも、それから——ちがうわ、まず鏡を持ってきて。それから枕を何個か私の後ろに押し込んで。そしたら体を起こして、あなたが料理するのが見られるから」と言うのでした。

それから一時間たって、ジョンジーはこう言った。「……スーちゃん。わたし、いつか、ナポリ湾を描きたいのよ」。そして、午後にはあの医者がやってきました。帰り際、スーも廊下に出ました。「……五分五分だな」と医者はスーの細く震えている手をとって言いました。「……よく看病すればあなたの勝ちになる。これからわたしは下の階にいる別の患者を診なければならん。ペアマンと言ったな——画家、なんだろうな。この患者も肺炎なんだ。もう高齢だし、体も弱っているし、急性だし。彼の方は、助からんだろう。だが今日、病院に行って、もう少し楽になるだろう」と言うのでした。

八、この作品がなぜ真に名作と呼ばれるかの所以ゆえんがここに記されている

次の日、医者はスーに言いました。「……もう危険はない。あなたの勝ちだ。あと必要なのは栄養と看病——それだけだよ」と言うのでした。その日の午後、ジョンジーがベツ

トでこれという実際の役にも立ちそうもない濃紺のウールの肩掛けを満足そうに編んでいる姿を見て、スーは、枕ごと彼女を強く抱くのでした。

そして、「……ちよつと話したいことがあるのよ、白ねずみちゃん」とスーは言いました。「……今日、ベアマンさんが病院で肺炎のためお亡くなりになったの。病気はたった二日だけだったわ。一日目の朝、下の自分の部屋で痛みのためどうしようもない状態になっているのを管理人さんが見つけたんですって。靴も服もぐっしり濡れていて、氷みたく想像もできなかったみたいだけど、まだ明かりのついたランタンが見つかったのか、はじめは元の場所から引きずり出されたはしごが見つかったのよ。それから、散らばっていた筆と、緑と黄色が混ぜられたパレットも。それから、——ねえ、窓の外を見てごらんさい。あの壁のところ、最後の一枚のつたの葉を見て。どうして、あの葉、風が吹いてもひらひら動かないのか、不思議に思わない？ ああ、ジョンジー、あれがベアマンさんの傑作なのよ——あの葉は、ベアマンさんが描いたものなのよ。最後の一枚の葉が散った夜に」と言うのでした。(完)

さて、この作品で一番大事なところは、一緒に生活をしてきたスーという女の子が最後の一枚の葉を描いたのではなく、実は、階下の一階に住んでいた重い肺炎を患っていたベアマン老人という人が、雨や風のはげしく吹くあんなひどい晩(夜)に、元の場所からはしごを引きずり出してから、明かりのついたランタンや筆やパレットなどを持って、はしごを登っていき、そして、最後の一枚の葉が散ったところに、新たに最後の一枚の葉を描いたのである。それでは、なぜそのような事をしたのかと敢えて問えば、それは次のような推移があるからである。

まず、スーはジョンジーの奇妙な空想をベアマンに話をすると、そのベアマン老人は、赤い目に涙を浮かべて、そんな馬鹿げた空想に軽蔑と嘲笑の大声を上げて、「……なんですと！ いったい葉っぱが何だつて言うのだ！ つたの葉が散るから自分も死ぬだなんて、そんな馬鹿なことを考える人間がどこの世界にいるんだね、そんな話は聞いたこともない。なんであなたは黙ってそんな馬鹿げた考えをあの娘に持たせておくのかね」と言うので、「……病気がひどくて、体も弱っているのよ。それに高熱のせいで、気持ちが悪く落ちていて、おかしな考えで頭がいっぱいなよ。私のためにモデルになつてくれないなら、しなくて結構よ」と言うのと、「……モデルにならぬと誰が言った？ あんたと一緒に行くよ。しかし、ここは、ミス・ジョンジーのような善良な娘が病気で寝込むようなところではない。——上の階に着いた時、ジョンジーは眠っていて、ベアマンを別の部屋へ呼び、二人は恐る恐る窓の外のつたを見つめた。そして一言も声を出さず、しばし二人して顔を見合わたとある。だとすれば、この時は、まだ「つたの葉」は残っていたことになる。それでは、最後の「一枚の葉」はいつたいつた何時散ったと言うのだろうか？

翌朝、スーが目覚めると、ジョンジーはどろんとした目を開いて、「……日よけをあけて、見たいの」と言うので、しぶしぶそれに従うと、昨夜、ああ、激しい雨と風が荒れ狂ったというのに、つたの葉が一枚、煉瓦の壁に残っていた。「……これが最後の一枚ね」

と言い、「……昨晚のうちに散ると思っていたのに。でも今日、あの葉は散るわ。一緒に、私も死ぬの」と呟くのでした。——さて、ここで熟慮すべきは、残った「一枚の葉」は、自然のままの「一枚の葉」なのか、それとも老画家が描いた「一枚の葉」なのかという問題であるが、もし老画家が描いた「一枚の葉」であれば、そこには「はしごをはじめ、明かりのついたランタンや筆やパレットなどが彼女たちの眼に見えたはずである。それゆえ、ここで残った「一枚の葉」は、老画家が描いた「一枚の葉」ではなく、自然のままの「一枚の葉」になるという事である。

昼が過ぎ、たそがれ時になっても、たった一枚残ったたの葉は、壁をはう枝にしがみついていた。やがて、夜が来るとともに北風が再び解き放たれる一方、雨は窓を打ち続け、低いオランダ風のひさしからは雨粒がぼたぼたと落ちていたとある。だとすれば、この日の夜のどこかで、残っていた「一枚の葉」は散ってしまったのである。そして、それを窓からふと見つけたベアマン老人は、「……ハツとして、このままでは若い命も散ってしまった。なんとかしなければとあれこれ思い迷っているうちに、ふと、ああ、そうだ！」と或る「思いつき」が浮かび上がり、激しい雨や風の吹き荒れる中、我が身のことも顧みず外へと飛び出し、そして、最後の一枚の葉が散ったところに、新たに最後の一枚の葉を描いたのである。

一方、重い肺炎を患い生きる希望を完全に喪失していたジョンジーという女の子は、どれほど激しい雨や風に打ちのめされても、じっと耐えて生き残っているその「一枚の葉」を見て、「……自分の考えは間違っていたわ。最後の最後まで生きる希望を捨ててはいけないのよと、自分の考えを改めて、生きる希望を再び取り戻すことになる」のである。

一方、階下の一階に住んでいた重い肺炎を患っていたベアマン老人という人は、残っていた「一枚の葉」が散っているのを、窓からふと見つけた時に、「……ハツとして、このままでは若い命も散ってしまう。なんとかしなければとあれこれ思い迷っているうちに、ふと、ああ、そうだ！」と或る「思いつき」が浮かび上がり、激しい雨や風の吹き荒れる中、我が身のことも顧みず外へと飛び出し、元の場所からはしごを引きずり出してから、明かりのついたランタンや筆や緑や黄色が混ぜられたパレットなどを持って、地上二十フィート（約六尺）ほどの高さまではしごを登っては、最後の一枚の葉が散ったところに、新たに最後の一枚の葉をかき描いたのである。それが直接の原因かどうかは分からないが、「……今日、ベアマンさんが病院で肺炎のためお亡くなりになったの。病気はたった二日だけだったわ。一日目の朝、下の自分の部屋で痛みのためどうしようもない状態になっているのを管理人さんが見つけたんですって。靴も服もぐっしり濡れていて、氷みたくに冷たくなっていたそうよ。あんなひどい晩にいったどこに行ってたのか、はじめは想像もできなかったみたい」とあるように、そのような行動をした結果として、自分の生命を賭してまで、若い女の子の生命を救ったという事になったと共に、その長く売れなかった老画家の人生の最期のところで自分でも納得のいくような「絵」（傑作）が描けたということにもなるのだろう。

\*

\*

賢者の贈り物

(オー・ヘンリー)

## 目次

オー・ヘンリーの世界

### 賢者の贈り物

- 一、夫（ジム）への贈り物を買うのに一ドル八十七セントしかないなんて
- 二、夫ジムの自慢は金時計であり、妻デラの自慢は美しい長い髪でした
- 三、夫ジムが家に帰り妻の髪型を見た時はただ茫然自失するばかりだった
- 四、二人とも自分のいちばん大切な宝をお互いのために犠牲にしてしまう

### ※ 参考文献

賢者の贈り物

(オー・ヘンリー)

一、夫(ジム)への贈り物を買うのに一ドル八十七セントしかないなんて

一ドル八十七セント。それで全部。しかもそのうち六十セントは一セント銅貨だ。乾物屋や八百屋や肉屋にけちけち値切って、はては、そんなしみつたれた買いかたを無言のうち非難されて顔から火の出る想いまでして、一枚、二枚と貯めた銅貨だった。デラは三度数え直した。一ドル八十七セント。そして明日はもうクリスマスだった。

これでは、みすぼらしい小さなソファに実を投げ出して、おいおい泣くよりほかに手はなかった。だからデラは泣いた。そうしているうちに、人生というものは、わあわあ泣くのと、しくしく泣くのと、微笑みとできており、しかも、しくしく泣くのが大部分を占めているのだと思うようになった。

この家の主婦がだんだん落ち着いてむせび泣きからすすり泣きの段階に移って来る間に、部屋の様子を見ておきましょう。ここは週八ドルの家具付きアパートです。言葉に絶するといふほどはひどくはないにしても、浮浪者狩りの警察官を用心して「アパート」と名づけただけの代物でした。……

階下の玄関口には、手紙など来そうもないような郵便受けと、人間の指ではどうにも鳴せないようなベルがあった。それにまた「ジェイムズ・デイリンガム・ヤング」という名刺が貼ってあった。それは、景気がよくて週給三十ドルをもらっていた時代には、その「デイリンガム」というミドル・ネームがそよ風に踊っていたが、収入が二十ドルに減った今では、「デイリンガム」という字はまるでつましくひっそりと頭文字の「D」だけになるうとするかのように、ぼやけてしまった。だがジェームズ・デイリンガム・ヤング氏は、帰宅して二階のアパートに辿り着くと、必ず先ほどデラという名前で紹介したジェイムズ・デイリンガム・ヤング夫人に「ジム」と呼ばれて、きつく抱きしめられるのだった。それはなかなか結構な話ではあるが……

デラは泣くのをやめ、頬に白粉をはたくのに意識を集中させた。デラは窓辺に立ち、灰色の裏庭にある灰色の塀の上を灰色の猫が歩いているのを物憂げに見た。明日はクリスマスだというのに、ジムに贈り物を買うお金が一ドル八十七セントしかない。ここ何ヶ月の間コツコツとためてきたのに、これがその結果なのだ。週二十ドルでは、大したことはできない。支出はデラが計算した以上であり、支出というものはいつだってそういうものだ。ジムへの贈り物を買うのに一ドル八十七セントしかないなんて。大切なジムなのに。デラは、ジムのために何かすばらしいものをあげようと、長い間計画していたのです。何か、すてきで、めったにないもの——ジムの所有物としてそれに少しでもふさわしいものをと想っていたのに……

二、夫ジムの自慢は金時計であり、妻デラの自慢は美しい長い髪でした

部屋には窓と窓との間に壁かけの鏡があった。週八ドルのアパートの鏡となると、読者にも見当がおつきだろう。非常にやせた、身ごなしの敏捷な人間なら、縦に断片的に映

る姿をすばやくつなぎ合わせて、自分の全身像をかなり正確に見ることが出来るかも知れないが、デラはまさにやせていたので、その芸当を身に付けていた。

急にデラは窓からくるりと身をひるがえし、その鏡の前に立ちました。デラの目はきらきらと輝いていましたが、顔は二十秒の間、色を失っていたのでした。デラは手早く髪を下ろし、その長さいっぱいまで垂らしました。

さて、ジェームズ・ディリンガム・ヤング夫婦には、自慢の宝がふたつあった。ひとつは、ジムが父から、いや、祖父から、譲られた金時計であった。もうひとつは、デラの美しい長い髪であった。シバの女王が通風縦孔たてあなの向こう側のアパートに住んでいて、デラが窓の外にぬれた美しい長い髪を垂らして乾かそうとしたら、それだけで、女王様の宝石や宝物は色あせてしまったことでしょう。また、ソロモン王が財宝を地下室につめこんで、そこで管理人をしていたとして、ジムは彼のそばを通るたびに金時計を取り出して見せたなら、王様はうらやましきの余りに自分の顎髭あごひげをかきむしったことだろう。

\*

\*

さて、彼女の美しい長い髪は茶色の滝のように波打って輝きながら、体のまわりに流れ落ちました。髪は彼女の膝の下まであって、まるで長い衣のようでした。やがてデラは神経質そうにまた手早く髪をまとめあげました。ためらいながら一分間じっと立っていました。が、そのうちに涙が一粒、二粒、すりきれた赤いカーペットに落ちました。

彼女は古びたジャケットを着て、古びた茶色の帽子をかぶった。スカートを一回転させてから、目にはまだ涙を光らせて、ドアの外に出て、階段を降りて表通りに出ました。そして、デラが足をとめたところには看板が出ていて、「かつら類一式、マダム・ソフロニ」と書いてあった。デラは階段をかけあげると、胸をどきどきさせながら勇気をふるい起こした。店の女主人は大柄おおがらで色は白すぎて冷やかかな感じのマダムで、とても「ソフロニ」（聡明）という名前のように見えなかった。

「……私の髪買ってくださいますか」とデラは言った。「……髪は買いますよ」と女主人は応えた。「……帽子をとって、ちよつと見せて」と言うので、そうすると茶色の（髪）滝がさざ波のようにこぼれ落ちた。「……二十ドルだね」となれた手つきで髪を持ち上げながら言った。「……ではすぐください」とデラは言うのでした。

ああ、それからの二時間、時はばら色の翼つばさに乗って軽やかに飛んでいった。いや、そんな使い古しの比喩ひゆは忘れてほしい。彼女はジムへの贈り物を探して店から店へと歩きまわった。そしてとうとうデラは見つけたのです。それは確かにジムのため、ジムのためだけに作られたものでした。それほどずばらしいものはどの店にもありませんでした。彼女は全部の店をひっくり返さんばかりに見たのですから。それはプラチナの時計鎖くわいで、デザインはシンプルで上品でした。ごてごてした飾りではなく、素材のみがその価値を主張していたのです——すべてのよきものがそうあるべきなのですが……。

その鎖は彼の時計につけるのにふさわしいとまで言えるものでした。その鎖を見たとき、これはジムのものだ、とデラにはわかりました。この鎖はジムに似ていました。寡黙だが、価値がある——この表現は鎖とジムの両方に当てはまりました。その鎖には二十一ドルかかり、デラは八十七セントをもって家に急いで帰りました。この鎖を時計につければ、どんな人の前でも堂々と時間を見ることができるとしよう。時計はすばらしかったが、鎖の代わりに古い皮紐ひもをつけていたため、ジムはこそこそと見る時もあつたのです。

デラは家に帰ると、興奮はさめて、分別と理性が少し戻ってきた。デラはカール用の鏝を取り出し、ガスに火をつけ、愛情と気前のよさの結果の惨状をつくらうとした。そういうことはいつもねえあなた——とてつもなく大変な仕事なのです。

四十分かかって、彼女は頭を小さな密集したカールでおおった。まるで髪型のせいで、ずる休みした学童みたいでした。彼女は自分の顔を長い間注意深く冷ややかにながめながら、「……まさかこんな頭だからといって、殺されることはないでしょう」とデラは思った。「……ジムはわたしのことを見るなり、コニーアイランドのコーラスガールだぐらいのことは言うかも知れない。でも仕方ないわ——ドル八十七セントではなにもできないもの」と言うのでした。——七時にコーヒをつくり、ストーブの上にフライパンをのせて、いつでもチョップ（豚や羊などのあばら骨つきの）厚切りの肉）を作れるように温めた。

### 三、夫ジムが家に帰り妻の髪型を見た時はただ茫然自失するばかりだった

夫（ジム）は帰りが遅れたことはなかった。デラは時計の鎖を手の中で二重に巻き、彼がいつも入ってくるドアの近くのテーブルの端に腰をかけた。やがて、一階の階段を昇ってくる足音が聞こえて来た。デラは一瞬青くなった。彼女は日頃、日常のつまらないことにも口のなかで短いお祈りを唱える癖があったが、この時は低く声に出した。「……どうか神様、あの人に今でも私を美しいと思わせてください……」と。

ドアが開いて、ジムが入ってきて、ドアを閉めた。ジムはやせていて、とても真剣な顔つきをしていました。かわいそうに彼はまだ二十二歳でした——それでいて彼は家族を背負っているのです。新しいオーバーも必要だし、手袋もしていませんでした。

夫（ジム）は部屋に入るなり、鶉の匂いをかぎつけた猟犬のようにびたりと動かなくなっていました。眼はじっとデラに注がれ、そしてそこにはデラに読みとれない表情がありました。それが彼女には恐かったのです。怒りでも、不満でもなく、恐怖でもなかった。彼女が覚悟していたどんな表情でもなかった。彼はそんな奇妙な表情を浮かべて、ただじっとデラを見つめています。

\*

\*

デラはよろけながらテーブルをまわって彼の方へ歩み寄った。「……ジム」と彼女は叫んだ。「……そんな眼でわたしを見ないで。私が髪を切って売ったのは、あなたにプレゼントもしないでクリスマスを過ごすなんて、とてもできなかったからなのよ。髪はまた伸びてくるわ——怒らないでしょう？ 仕方なかったのよ。私の髪はすぐ早く伸びるの。『……クリスマスおめでとう』って言って、ジム。楽しくしましょう。あなたには私がどんなにすてきな——どんなに美しく、どんなにすばらしい——プレゼントを買ってきたか分からないでしょ」と言うのでした。

すると、「……髪を切ってしまったのか？」とようやくジムは、どんなに懸命に考えても目の前の事実が理解できないかのように言った。「……切って売ったわ」とデラは言いました。「……もう前のように私を好きでないと言うの？ 髪がなくても私は私でしょう？」と言うと、ジムはいぶかしげに部屋を見まわしながら、「……君はもう髪がないと言うんだね？」と彼はどこか魂が抜けたかのように言うのでした。

「……探すことはないわ？」とデラは言った。「……売ったのよ——売って、もうなく

なったのよ。さあ、今夜はクリスマス・イブよ。優しくしてね。あなたのためにしたことなのよ。私の髪の毛はきつと神様が数えてくださっていたと思うけど」と急に真顔で甘い声になって続けた。「……でもあなたに対する私の愛情は誰にも測れはしないわ。チョップを火にかける？ ジム」と言うのでした。

#### 四、二人とも自分のいちばん大切な宝をお互いのために犠牲にしてしまう

ジムはたちまち茫然自失から醒めたようであった。彼はデラを抱きしめた。ここで十秒間われわれは本題からはなれて、ひとつ、取るに足らぬ問題を慎重に考察してみよう。週八ドルと年百万ドル——その違いはなんだろうか。数学者や才人に質問してもその正しい答えは得られないでしょう。また、東方の賢者たちはいろいろな貴重な贈り物を持ってきました、そのなかにも解答は含まれてはいないのです。この不可思議な言辞は後でやがてはつきりするだろう。……

ジムはオーバーのポケットから包みを取り出して、テーブルの上にはんと置いた。「……ねえデラ、僕を誤解しないでおくれ」と彼は言った。「……髪を切ろうと、シャンプしよう、そんなことで妻が好きでなくなるようなことはないさ。だがその包みを開けたなら、ぼくがどうして最初啞然となったか、その理由が分かるよ」と言うのでした。

白い指が素早く「紐と紙」をひきちぎりました——すると「歓喜の叫び」が上がり、ああ、それが次の瞬間——女性特有のヒステリックな涙と号泣に早変わりし、主人はあらゆる手を尽くして妻を慰めなければならなかったのです。

そこには櫛が入っていた——デラがかねがかねとこがれていた、ブロードウェイのウィンドーに飾ってあった、横髪と後ろ髪用のセットの櫛が、それは本物のべっ甲の、ふちに寶石をちりばめた、美しい櫛であった。その美しい髪にさすに似合いの色だった。高価なものだけとは分かっていたので、持てるとは夢にも思わないで、ただほしくてあこがれていただけであったが、それがいま自分のものになったのだ。だが、その待望の櫛を飾る房々とした髪の方はすでになくなっていましたのです。

だが彼女は櫛をしっかりと胸に抱きしめた。しばらくしてようやく顔をあげると、かすんだ眼で微笑しながら言った。「……私の髪はとても早く伸びるのよ、ジム」。だが次の瞬間、毛をこがした小猫のように飛びあがって、叫んでいた。「……きゃっ、そうだ」と。

ジムはまだデラの美しいプレゼントを見ていなかったのだ。デラはそれを手の平にのせて、いそいそと彼に差し出した。鈍い光を放っている貴金属は、彼女のきらめく熱烈な精神を反映して輝いているようだった。

「……ねえ素敵じゃない？ ジム。町中探して、見つけてきたのよ。これからは一日に百回も時間を見ないではいられなくなるわよ。さあ、時計を出して！ 時計についたら、どんなに美しいか見てみたいわ」と言うのでした。

ジムは言われた通りにはしないで、ソファに寝転がると頭の後ろに両手を廻して、微笑した。「……デラ」と彼は言った。「……ぼくたちのクリスマス・プレゼントはかたづけ、しばらくしまっておこう。いま使うには立派すぎるよ。櫛を買う金を作ろうと思っ

ぼくはあの時計を売ったんだ。さあ、チョコップを火にかけてくれないか」と言うのでした。

\* \*  
ご承知のように、飼い葉桶おけのなかの「嬰兒みどりご（イエス）」に贈りものを持ってきた東方の賢者たちは、賢い人たちだった――すばらしく賢い人たちだった。彼らがクリスマスマスにプレゼントを贈ることを始めた最初の人たちなのです。彼らは賢いから、彼らの贈りものも賢明だった。恐らく重複したら他の品物に取りかえる特権も与えられていたことでしょう。ところでここに私がつたなく語ってきたのは、「……自分たちのいちばん大切な宝をお互いのためにいとも愚かしく犠牲にしまった」という、そういうアパート住まいのまだうら若い二人のこれという波瀾はらんもないごく一般的な物語なのです。

だが、最後に現代の賢い人たちに一言言っておくと、人にもものを贈る人のなかで、この二人こそもっとも賢明だった。贈りものをあげたり、もらったりする人のなかで、彼らのような人間こそもっとも賢明なのだ。世界のどこに住んでいようと、彼らこそもっとも賢明なのだ。彼らこそ東方の賢者なのです。（完）

\* \*  
まず、飼い葉桶おけのなかの「嬰兒みどりご（イエス）」に贈りものを持ってきた東方の賢者たちは、賢い人たちだった――すばらしく賢い人たちだった。彼らがクリスマスマスにプレゼントを贈ることを始めた最初の人たちだったとあるが、それは、次のようなことである。

つまり、新約聖書の『マタイ伝』のなかに次のような記述がある。「……さてイエス・キリストの誕生はこのようであった。――イエスの母マリヤがヨセフと婚約こんやくの間柄あいだがらで、まだ一しよにならないうちに、聖霊せいれいによって身重みおもになっていくことが知れる。夫ヨセフはあわれぶかい人であったので、（これを公沙汰おおよけざたにして）女を晒さらし者にすることを好まず、内証ないしよで離縁りえんしようとした。しかしなおもそのことを思案しあんしていると、主の使いが夢ゆめでヨセフに現あらわれて言った。『……ダビデの末なるヨセフよ、心配しんぱいせずにあなたの妻マリヤを家に迎むかえよ。体内たいないにやどっている者は、聖書によるのである』と。

\* \*  
さてイエスはヘロデ大王だいおうの代よにユダヤの町ベツレヘムでお生まれになったが、その時、東の国の博士はかせ（賢者）たちがエルサレムに来て言った。「……今度お生まれになったユダヤ人の王（救世主）はどこにおられるか。われわれはそのお方かたの星ほしが出るのを見たので、おがみにまいった」と。

（救世主が生まれたと聞いて）、ヘロデ王はもちろん、エルサレム中じゆうの人々も王と共にうろたえた。そこで王は国の大祭司連だいさいしれん、聖書学者せいしよがくしやたちを全部集めて、救世主はどこで生まれるべきであるかとたずねた。（彼等は答えた）。預言者よげんしやミカによって、こう書かれていくからである。それは、「……お前、ユダの地なる『ベツレヘム』、お前はユダの町々の中で、最も劣おとっているものでは決してない。一人の偉大なる支配者しはいしやがお前なかの中から出て、わが民イスラエルを牧ぼくするのだから……」。

そのあとヘロデは内証ないしよで博士はかせたちを呼びよせ、最初に星の現われた時間を彼らに確かめた上で、こう言ってベツレヘムへやった。「……行って幼子おきなごの居所いどころを丹念たんねんに探し、見つけ次第しだい、報告ほうこくせよ。自分も行っておがみたいから」と。王の言葉を聞いて博士たちが出掛けると、見よ、前に東の国で出るのを見た星が彼らの先に立って、幼児のいる所の上まで行って止まった。彼らはその星を見た時、大喜びに喜んだ。家に入って、幼児が母マリヤ

と共にいるのを見ると、ひれ伏して拝み、宝箱たからばこを開いて、「黄金、乳香にゆうこう、没薬もつやく」を贈り物として捧げた」と『新約聖書』には記述されている。

さて、本文に戻ると、「……彼ら（博士ら）は賢明だから、彼らの贈りものも賢明だった。恐らく重複したら他の品物に取りかえる特権も与えられていたことだろう。とここでここに私がつたなく語ってきたのは、「……自分たちのいちばん大切な宝をお互いのためにいとも愚かしく犠牲にしまった」という、そういうアパート住まいのまだうら若い二人のこれという波瀾はらんもないごく一般的な物語なのです。

\*

\*

だが、最後に現代の賢明けんめいな人たちに一言言っておくと、人にもものを贈る人のなかで、この二人こそもっとも賢明だった。贈りものをあげたり、もらったりする人のなかで、彼らのような人間こそもっとも賢明なのだ。世界のどこに住んでいようと、彼らこそもっとも賢明なのだ。彼らこそ東方の賢者なのです。「これは「……自分たちのいちばん大切な宝をお互いのためにいとも愚かしく犠牲にしまった」。それは「相手への深い想い（その愛の深さ）をお互いに眼に見える形で示しているのである。つまり「贈り物」というのは、「相手への想い」（その「相手への想い」がどれほどのものであるか？）をお互いに眼に見える形で示しているものであり、そして「心魂こころ」からの「贈り物」こそは、まさに「賢者の贈り物」となるのである。（完）

\*

\*

「参考文献」

- ※底本「幸せの王子」結城浩訳（「青空文庫」）
- ※底本「わがままな大男」結城浩訳（「青空文庫」）
- ※底本「最後の一片」結城浩訳（「青空文庫」）
- ※底本「賢者の贈り物」結城浩訳（「青空文庫」）
- ※底本「賢者の贈り物」大津栄一郎訳（「岩波文庫」）
- ※底本「福音書」塚本虎二訳（「岩波文庫」）